

〈日本古代中世部会〉

天平十五年金光明最勝王經転読と陸奥国

—福島県江平遺跡出土木簡再考—

東北大学大学院文学研究科 堀 裕

一九九九年に、福島県玉川村江平遺跡から出土した木簡には、「些万呂」による『金光明経』に関わる経典の誦経と、「天平十五年三月」の年月などが記されている。これが、『続日本紀』に記載された、天平十五年（七四三）正月十四日から四十九日間、大養徳国金光明寺（東大寺）を中心に、全国で行われた、『金光明最勝王経』転読会と関わる木簡であるとして注目されてきた。これまでも、多くの研究者によって木簡の読解と内容の解明が進められてきたが、なお検討の必要がある。①木簡に記載された「大弁・功德・四天王」の記述から、『金光明最勝王経』ではなく『金光明経』を誦経したとする説は首肯されるが、四巻本『金光明経』であって八巻本でないとする論拠は十分でない。四巻本であることを前提に、六人で『金光明経』を分担して誦経したとする説に至っては成立しえない。②「些万呂」を施主とみることの誤りは明白だが、有力者の一族や私度僧とするのも不十分である。出家前の修行者である優婆塞とみるのが整合的であると考ええる。③この法会では、大和国分寺・国分尼寺の僧尼を得度するため、優婆塞・優婆夷を集めていた。それを前提に考えれば、優婆塞とみられる些万呂は、陸奥国国分寺僧侶の候補であり、そのため天平十五年春の法会の間、誦経を行っていたと考えられる。なお、本報告には、東北歴史博物館編『東大寺と東北』展覧会図録解説（二〇一八年）で報告者が指摘した内容が一部含まれている。